

心の奥に長崎復興の願い

法王に支援要請 孤児院に寄付も

1945年8月9日に長崎に原爆を投下した米B29爆撃機「ボックスカー」の故チャールズ・スウィニー機長(1919～2004年)が、60年代初めにローマ法王ヨハネ23世(在位58～63年)に個人的に謁見、被爆地の復興支援を要請していたことが遺族の証言で7日分かった。長崎への原爆投下70年を前に、スウィニー氏の故郷の米ボストン近郊クインシーで次女や弟が共同通信の取材に応じた。



広島市近郊の孤児院を訪れたチャールズ・スウィニー氏(手前)=1989年

投下70年を前に遺族証言

スウィニー氏は敬虔なカトリック信徒。45年9月に軍の任務で米科学者らと長崎を訪問した。その後、戦災孤児院のことを気にかけて、長崎のカトリック系孤児院に寄付したと遺族に話していた。

原爆投下についてスウィニー氏は「戦争終結を早めた」として必要だったとの主張を買った。だが、宗教や倫理の問題に詳しい国際基督教大の森本あんり教授は、寄付などの行為から「孤児たちにすまなかつた」との思いが心の奥にあるのが分かる」と語った。

次女マリリン・ハウさん(67)によると、スウィニー氏

は62年ごろバチカンを訪れ、ヨハネ23世に夫婦で謁見、被爆で全壊後、再建された長崎の浦上天主堂への追加支援などを求めた。法王庁のプレス担当者は公式記録による確認は困難としている。ヨハネ23世は62年10月のキューバ危機の際、米ソの仲介に尽力、翌年には、核兵器は禁止されねばならないとした公式見解「地上の平和」を出した。

ハウさんは、50年代後半、60年代前半に父と「浦上の孤児院」のことをよく話し合ったとし、「再興を願い浦上教会に寄付していた」と明かした。弟のウィリアム氏(74)も「兄は長崎のカトリック施設にお金を毎年送ろうと言っていた。多くの人が犠牲になった

長崎への原爆投下 1945年8月9日、米B29爆撃機「ボックスカー」が浦上天主堂を破壊させ、同年末までに推計約7万4千人が死亡した。当初目標は小倉だったが視界不良のため長崎に変更。投下後は燃料不足のため、沖縄の米軍基地に緊急着陸した。

惨状目の当たりに

「人々は廃虚の中、ぼうぜん」と虚空を見つめていた。国に裏切られ、困窮しているようだった。長崎に原爆を投下した米爆撃機の機長だった故チャールズ・スウィニー氏は終戦間もない1945年9月、米被爆地調査団と一緒に長崎を訪れ、爆心地付近にも足を踏み入れてこう述べていた。

爆心地から約5000坪の浦上天主堂は被爆で何夜も燃え続け、崩壊、浦上の信徒約1万2千人のうち推計8500人が死亡した。「絶望のどん

底だった」。被爆し、孤児院になったカトリック修道士の田川幸一さん(87)は当時、自分が涙を流して焼け跡を見つめていたことを覚えている。

カトリック信徒のスウィニー氏は、浦上が長崎の信仰を代表する地と知っていたという。被爆地の惨状は心を離れず、後にローマ法王に復興への助力を要請することになったとみられる。

天主堂は59年に信徒の寄付などで再建されるが、浦上教会の深堀繁美さん(84)による

と、信徒らは自身の生活を二の次にし、「掘って立て小屋に住みながら寄付金を拠出した。一方、長崎市の「聖母の騎士修道院(カトリック系)の施設の原爆・戦争孤児は46年末には100人を超えていたという。スウィニー氏は、こうした戦争の爪痕にも心を痛め続けていた。

次女マリリン・ハウさんは75年、南米コロンビアの女兒を養子に迎えた。スウィニー氏はこの際、長崎からの縁組を勧めたが、当時は法的問題で日本からは引き受けられなかつたという。

スウィニー氏は89年に訪れた広島でも、かつて原爆孤児を収容した児童福祉施設を訪れ、寄付の小切手を手渡した。一緒に祈りをささげた修道女(86)は「死の前に巡礼地を訪れたいという気持ちだったのでは」と振り返った。